

2002年の幕が開きました。今回は、新しい年を迎えるに当たって、自分なりの夢や目標を胸に抱く3人の方々にお話を伺いました。

「飛び出すと、空に浮かんでいよう、まるで鳥になったみたい。それがおもしろいんだ」。

秋が目指すもの

冬のスポーツの花形、スキージャンプ。今年、ソルトレークシティ五輪で鳥人たちの競演が繰り広げられる。いつの日か、そんな夢の舞台に自分も立ってみたい。

細田 将太郎 くん

札幌ジャンプスポーツ少年団

スキージャンプ

スポーツ少年団

団に所属する細田将太郎くん。彼がジャンプに興味を示すようになったのは、一九九八年の長野オリンピックがきっかけでした。ラージヒル団で優勝した日本チーム、特に原田選手の姿に感動を受け、自分もジャンプをやってみよう、そんな思いが込み上げてきたのです。

当時、六歳の将太郎くんの願いに、ご両親も最初は戸惑いましたが、少年団の体験ジャンプへの参加などを経て、次第に将太郎くんの熱意が本物であると確信するようになり、そして一昨年、小学三年生になった将太郎くんは、正式に少年団の一員となり、本格的にジャンプに打ち込み始めたのです。

もともと、アルペンスキーに熱中していた将太郎くん。



練習中の将太郎くん

ジャンプに対する資質も備えていました。昨年一月の、はまなすライオンズ杯では、将太郎くんにとって初めての大会であり、しかも全国から選手が集まる中で、小学四年生以下の部で三位という堂々たる成績を収めたのです。

しかし、決して何もかも順調だったわけではありません。初めて飛んだ時に、その恐怖で一時間泣きじゃくったこともありました。ジャンプ台の上から着地点は全く見えません。その中で飛び出していくのは大変な恐怖です。選手は、それを克服していかなくてはならないんです」と、父親の健一さんは語ります。自分の力を信じ、恐怖心に打ち勝つことで、将太郎くんは大会で結果を出すことができましたのです。

その後、数々の大会に参加する中で、周囲が青ざめるような大転倒も経験しました。しかし、それでも将太郎くんのジャンプに対する情熱は揺るぎません。いや、ますます強くな

なっています。「ジャンプ台を降りる時は強い風を受けている感じがして、飛び出すと、空に浮かんでいるように、まるで鳥になったみたい。それがおもしろいんだ」と将太郎くんは、一生懸命にジャンプの魅力を伝えてくれました。

大倉山ジャンプ競技場で飛んでみたい、そしてオリンピックに出たい。それが将太郎くんの大きな夢。ジャンプを楽しむ気持ちと困難に屈しない勇気を今のまま持ち続けられれば、いつかその夢をかなえられるかもしれません。



ジャンプに挑戦する子供は少ないと言う将太郎くん(右)と健一さん(左)。互いに錬磨する仲間がたくさん欲しいと望んでいます